



黒のドレス erotica

花束を



詩とラブ

大竹清仁展

—四季の夢—

2023.4.29 (土) ~ 5.14 (日)

■アクセス■

- ・東武伊勢崎線足利市駅徒歩 12分・JR 両毛線足利駅徒歩 8分
- ・北関東自動車道足利ICより 15分
(駐車場 3台・近隣にも無料駐車場があります)
- 11:00~18:00 (最終日は 16:00 まで)
月・火曜休廊 (月・火が祭日の場合は営業し、翌日休)
- 軽食とソフトドリンクもお楽しみいただけます。



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通2丁目 2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>

剥ぎ取られた色、剥ぎ取られた線

大竹清仁の絵画はどこかエゴン・シーレを思わせる雰囲気を持っているが、シーレほど退廃的ではなく、もう少し動的で軽やかな花の香りがする。後に彼が美容師でもあることを知ったのだが、これが彼の女性に対する皮膚感覚、対象物との距離感なのだろうと感じさせた。

絵画は多くの場合、白い下地（油彩であればキャンバス）にさまざまな色を塗り重ねることによって生まれる（時に塗り重ねた色を一部削り取ることもあるが、それも色を塗り重ねる作業の一部だろう）。大竹の場合も間違いなく色を塗り重ねることによってその絵画が成り立っているのだが、見た目の印象はそうではない。そこに存在していたであろう多くの色や線がゴツソリ剥ぎ取られてしまった「残骸」あるいは「かけら」のように見えるのだ。それ故廃墟のような乾いた空気を抱えながら剥ぎ取られたばかりの表面の生々しさというものを併せ持つ。特に殆ど剥ぎ取られてほんの微かに消え残ったように描かれる線は絵画表面から静かに立ち上がろうとしているように見え、とても魅力的だ。この線が彼の絵画のすべてを支えていると言っても良い。

このような彼の絵画をなんと表現したら良いのだろうか。本来色を重ねていくことはプラスの作業の筈なのだが、彼の場合はそれがマイナスの作業のように作用する。目の前に在るのは、マイナスを幾重にも重ねた世界であり、それが震えや切なさや愛らしさを産み出している。かといって絵画自身は自らの存在を痛んでいるようには見えない。痛んでいるのはむしろこの絵画を見ている私たち自身だろうか。

※大竹清仁画集『/O』より抜粋
岩本圭司（造形家・artspace & café 代表）



上:四季の夢 春
下:四季の夢 夏



撮影：Yukio Misawa

大竹清仁 Kiyohito Ootake

1972 群馬県生まれ
1994 群馬県美容高等専修学校卒業
1999 rrecordz 創立
2011 セツ・モードセミナー卒業
2016 亀山知英氏に銅版画を学ぶ
2020 渡仏

詩人画家・日本美術家連盟会員

【受賞歴】

2011 セツ展 ターナー賞受賞
2018 第53回一期会 新人賞受賞
2021 第55回一期会 評論家中野賞
2021 第72回群馬県美術展覧会 奨励賞



四季の夢 冬



四季の夢 秋



artspace & café

〒326-0814 栃木県足利市通2丁目2658

Tel : 0284-82-9172

E-Mail : info@artspace-and-cafe.com

URL : <http://artspace-and-cafe-ashikaga.com/>

